

法然師のいわれたことをそのまんま信じているだけで

あとはなんにもありません。

念仏をとなえることがほんとに浄土に生まれかわるたねになるのか。

それともそれがもとで地獄におちてしまうのか。

それもまったくわからない。

でもたとえ法然師にまんまとだまされて

それで念仏して地獄に墮ちたとしても

わたしは後悔なんぞしません。

理由はこうだ。

修行をかさねてぜったい仏になれるだろうというような人が

念仏をとなえたせいで地獄におちるようなことになれば、

それこそだまされたという後悔もあるでしょう。

ところがわたしは

どんな行もできないような人間です。

地獄がすみかと決まっている。

アミダ仏の『すべての生きものを救いたい』というお誓いが真実なら

シャカ尊者のお説教も、うそやはっきりではないはず。

シヤカ尊者のお説教がほんとなら

善導大師ぜんどうだいしのご解釈もうそじゃないはず。

善導大師のご解釈がほんとはあるなら

法然師のいわれたこともうそであるはずがない。

法然師のいわれたことが真実ならば

親鸞のいってることもうそではない。

とどのつまり、わたしのような未熟者の信心しんじんはこの程度です。これから先は、念仏の道を選ぼうがまた捨てようが、それぞれの判断におまかせしたい」と。

第三条

「善人だって浄土に生まれかわるんだから

悪人にできないわけではない。

ところがふつう世間の人はこうなのだ。

悪人だって浄土に生まれかわるんだから

善人にできないわけではない、と。

これは一理あるようだが

『何もかもおまかせする』という考えからするとまちがいなのだ。

なぜかという、自分の力で善い行ないのである人は

アミダにおまかせしようという気持ちに欠けるから

お誓いの力がおよばない。

でも、自分の力でなんとかしようという気持ちをすてて

アミダの力にすっかりおまかせすれば

死んだあとはかならず浄土に生まれかわることができる。

迷いのつきないおれたちは、どんな行ぎょうをしたって

生きたり死んだりのくりかえしをやめられないのだ。

アミダ仏は、それをあわれんで

おれたちみんなを救おうと誓ってくださった。

悪人どもを仏にしてくださいのためなんだよ。

だから、アミダにおまかせするしかない悪人は

浄土にいちばんちかいところにいる。

善人だって浄土に生まれかわることができるんだから

ましてや悪人にそれができないわけがないじゃないか」と。

第四条

「慈悲についていえば

自分の力で修行して仏になろうという聖道しょうどうと

アミダのお誓いにおまかせして浄土に生まれて仏になろうという浄土では
だいぶちがう。

聖道の慈悲とは

生きているすべてのものを

あわれみ、いとおしみ、そだてようということだ。

でも思いどおりに他人を救うことなんてできやしないのだ。

浄土の慈悲とは

念仏をとなえて浄土にいつて

なるたけいそいで仏になって

他者を救いたいという大きな心を手に入れて

おもいきり

生きてる、いや生かされているすべてのものを救うということだ。

この世でどんなにあわれだ、不憫ふびんだと思っても
思うように救ってやれないんだから、
救いたいと思う心の
持って行き場がないじゃないか。
だから念仏をとなえなさい。
他者を救いたいというおまえの思いを
最後までつらぬきとおすことができる」と。

第五条

「親鸞おれは

親の供養のために念仏をとなえたことはいっぺんもないよ。
だって生きてるものはすべて
生まれ変わり死に変わりしていく間
いつか、どこかで、親になったりきょうだいになったりしてるはずなんだ。
仏に生まれかわることができたときには
それをみんな、救ってあげたい。

自分の力でがんばれば救えるっていうならとっくにそうしている。
でもそうじゃないのだ。

念仏をとなえるということは、そうではないのだ。

だから今は自分の力でなんとかしようなんて考えは捨てて
念仏をとなえて死んで浄土へ行けばよい。

そうすれば人を救う力だってえられる。

その力で

生き死にをくり返していようとも苦に沈んでいようとも

まず縁のあるものたちから

救いだすことができるのだ」と。

第六条

「念仏をとなえていこうという仲間うちで

おれの弟子だ、ひとの弟子だと争ってるらしいが
ばかばかしいの一言だ。

親鸞おれは、弟子なんか一人も持ったことがない。